

どうやら、再び城娘の人気を決める入札が始まるみたいです。前回行われた時は確か安土城発案で行われたのですよね。今回はアイドルユニットを決める為のものでなく、単なる人気投票なようですけど。あの時も例に漏れず、兜達が邪魔をしてきたのですよね。今度は邪魔が入らないといいですね。

・・・よし、面白そうだから、邪魔をしましょう。私こと、信貴山城はそう決めました。

信貴山城の人気投票お邪魔大作戦♪

―東北の会場にて

さて、準備も整ったので早速始めましょうか。

会場の様子とは、それなりに人がいるようです。おや、何故か殿御一行がいますね。わざわざこんな辺鄙なところまで来て何の用なのでしょうかね。おおよそ各地の投票所を回っているだけでしょう。まあ、少々厄介でしょうが問題ないでしょう。

まずは、古天明平蜘蛛で一発ぶっ放しましょうか。よいしょっと。

「それ、天罰です!!!」

ドーン!!!バーン!!!

よし、直撃ですか!!!

ん?おやおや。すんでの所で殿が投票箱を避難させたようですね。さすがですね。

「一体何事でしょうか!?!」

柳川城は勿論、その場にいた数人の城娘も辺りを見回しながら警戒し始めましたね。

では、こちらも・・・パチッ!!!

ザザッ、ザザッ。

予め見つけ出して例の瘴気もどきで操っておいた桃形兜等を見えるように登場させ、

「あ、とのー。たすけてくださいー。またしてもかぶとにー、こてんみようひらぐもがやつられてしまってー、こまっていますー」

よし、我ながらいい演技です。これで思い存分、砲撃し続けられます。

と思ったのですが、殿と柳川城以外の皆さんは疑いの目を向けていますね。

仕方ないですね。そのまま押し切りましょう。

ドドドドドドドドッ。ドドドドドドドドッ。ドーン!

ザシュッ、グサッ、バーン!ボコッ、ゴーン!!!

まあ、さすがに雑兵だけで何とかなる相手では無かったですね。

仕方ありませんね。ここは諦めましょう。

「殿、ご縁があったらお茶でも飲みましょう。それではごきげんよう!」ゴーン!!!

まだチャンスはあるはずです。次こそは……。

―関東の会場にて

さて、巫女服に着替えて再挑戦です。

おや、関東の城娘に混ざって、我が妹の多聞山城がいるではないですか。

先日の東北での強襲を知り、各投票所での警戒を強めたのでしょね。今回は殿たちの姿が見えないので、他の投票所にいるのでしょね。

それでもやることは変わりません。全力で入札の邪魔をしましょう。

「さて、姉様はどこから来るのかしら？」

「まあまあ多聞山城。そんなに気を張ると疲れますよ。」

「……何を為さっているのですか、姉様？」

「頑張っている妹にせめてもの差し入れをと思っただけです。これでも飲んで一息ついたらどうですか？」

どこかの日本三大山城のおかえりボイスのような台詞を言いながら、お茶を差し出したのですが、

「……。狛犬さん、お茶でもどうぞ。」と多聞山城は近くにいた鉄狛にそのお茶を与えた。当たり前！

「鉄狛、しっかりするのじゃ!!」

宇都宮城の鉄狛はお茶の隠し味である痺れ薬のせいで急に倒れてしまいました。チツ、賢しい妹ですね。

「ミコミコ??」

「姉様! いい加減にしてください!!」

「さすがは我が妹ですね。ですが、私の策がこれだけとは限りませんよ。よっと。」

私は次の作戦の為、坂の上まで飛んで、御城状態の振袖に着替えつつ予め用意していたブーツを引っ張り出した。

「さあこれこそ、信貴山城の宴会芸の一つ、爆弾転がしです!」

そう言うってから、数多くの等身大の爆弾を一気に坂から転がせた。

ごろごろごろごろ!!

よし、これなら防げない。と高を括っていると、

「無疆たる螺旋式よ……今こそその力を示せ!」ザシユ、グサツ、ザシユ!

バンバンバンバンバン!!

何者かの斬撃と刺撃によって、投票箱に到達する前に全ての爆弾が消滅してしまった。

江戸城、千代田城、そして館山城でした。

なるほど。最近、現れた手練れの城娘は関東出身でしたか。さすがに彼女らと対峙するには荷が勝ちすぎますね。しょうがないですね。

「古天明平蜘蛛、遁走モード!!!」トコトコトコトコトコ。

「あ、待ちなさい!姉様!」

次こそはと思い、ふと多聞山城の方を向くと悲しげな顔をしていた。何故でしょう。こんな悪戯はいつものことでしょうか。

私はまだ、その意味を理解できなかった。

―近畿の会場

さて、ここは多聞山城の出身地だから警備も万全でしょうね。案の定、龍王山城などの旧知の城娘を集結させていますね。

ですけど、姉である私にとっても庭のようなものですよ。

地の利はこちらにもありますし、旧知の存在もいるのですよ。

「イエ、私ト貴方ハそんな親密ナ仲では無いでシヨウ?」

後ろで構えていた明智光秀の名を冠する大将兜が私の隣までやってきた。

「おや、丹波では共謀した仲ではないですか。そんなに邪険にしなくても!」

「相変ワラズ貴方ノ考えてイル事ハ理解できませんネ。デ、私ハそのまま集マツテいる城娘ヲ狙エバいいのですヨネ。殿がないノデあまり乗り気はシマセンガ・・・」

「ええ、そうですよ。私がある間に投票箱を破壊しますので、宜しくお願いしますね!」

「・・・嘗テ私達兜ニヨル入札ヲ城娘タチガ邪魔シタノですケドネ。可笑しな因果デスガ後顧ノ憂イヲ消し去ル機会ナノデ、やるシカないデスネ。総員突撃!!!」

ガサガサガサ!

「突!突!突!突!突!」

何やらよく分からないことを言っていた気がしますが、これでこの地方の投票は妨害できますね。

「また兜ですか!でも、雑兵だけなら何とかなるでしょう!」

バンバンバン!!!

「何事だ!?!この銃撃はまさか光秀の名を冠する大将兜か!?!」

よし、大将兜も上手く戦っているようですね。では、この隙に投票箱にほうろく玉を投げるとして!

ザシュザシュザシュ!ビュンビュンビュン!

「ク、中々やる様ニなりマシタネ。丹波亀山城、丹波横山城!」

「全く、君は何で信貴山城にいいように使われているんだ!」

「ホンマですわ。こんなのが自分の城主の名を冠しているなんて、情けなくて涙が出てしまいますよ!」

ああ、もう少しは粘ると思ったのですが仕方ありません。早々に爆破して!

「そうはさせませんわよ、姉様!」

「・・・てへ♪」

目の前に多聞山城がいたので思わず誤魔化そうとしました。しかし、妹の目は厳しいままです。やれやれ今回も失敗ですか。

「ほら、光秀。さっさと撤退しますよ」

そう促して、私と大将兜と僅かに生き残った兜は撤退をした。これではらくは光秀軍からの進撃はされないだろうという考えがあったら、私も少しは城娘らしいのでしょうか、そんな考えはちつともなかったです。

それにしても、丹波亀山城も丹波横山城も憐れむような目で見ていた気がしますね。

まあ、そんなことは私には関係ないですけどね。さて、次の会場はどこでしょうか？

― 四国の会場

今回は私、信貴山城の権能でもある毘沙門天の加護を最大限発揮して、近くの茂みまで潜むことにしましょう。ちなみに今までもこの権能を発揮して、投票所を見張っていました。コソコソコソ

さて、ほうろく玉の射程範囲まで到着しました。おや、今回は殿も多聞山城もいないようですね。これは千載一遇のチャンス！後は、これを投げ込んでと。

「それ」ポイツと。

これで気づかれずに投票箱を爆破できると思いましたが、

「そこだー!!」ビュン！ ドーン！

苦無のようなものでほうろく玉が空中で爆破されてしまいました。

「あと、そこも！」ビュン、ビュン！

とこちらにも向けて投げてきたので、思わず飛び出るようになりました。

「やっぱり油断も隙もないね、しぎーは！」

「ふふ、いくらここが四国とはいえ、貴方に邪魔されるとは思いませんでした。十河城」旧知の仲でもある十河城が私の前に立ち塞がりました。いつもはこちらが主導権を握っているのですが、見ないうちに成長を果たせたようですね。私の気配を感じられるようになったのは、殿のおかげでしょうか。

「さあ、しぎー。もうこんな馬鹿げたことは止めて、純粹に入札を楽しもうよ」

「おや、私がおんな催しに素直に参加すると思ったのですか。もしそうなら、まだまだ甘いですね」

と強がってはみますが、十河城は私の僅かの拳動も見逃そうとしないので万事休すです。まさか、この私が逃げる事さえまならないとは・・・。試してみますか。

「そうです、十河城。今度、美味しいうどんでも送ってあげますから、この場は見逃してはくれないでしょうか？」

「いや！この前、しぎーがうどん玉を送ってきたせいで、引田城ちゃんのうどん食べられ

なかったんだからね。もうあんな思いは嫌！」

「全く、貴方という城娘は何でも疑いすぎですよ。現に何も入っていなかったのに。そういえば、この四国には温泉の名所があるようですね。これから、二人きりで行きませんか？」

「しぎーとの温泉旅行……。いやいや、絶対何か企んでるよ。そんなの行かない！」

「もう貴方は。どうすれば私の事を信用してくれるのでしょうかね」

よし、ここまでは予想通り。では……。

「あ、馬が暴れ出そうとしている！」

「ま、まさか。しぎーがまた何か細工でもしたの！……あれ、大人しいまま？」

と十河城が一時的に後方にいた馬の方を向いた隙を突いて、私は隠し持っていた失敗作の爆弾を空中に投げた。ただ投げる隙が出来れば良かった。何しろその失敗作は――

ドーン！！！！

やたら大きい音だけを発生させる爆弾であった。私は勿論、耳を塞いでいたから問題なかったですが、さすがの十河城も少しは怯んだようでした。

そして、何より

「ヒヒーン！！」パカランパカラン！！

あまりの爆音で馬は本当に暴れ出し、私の方に向かって走ってきた。

私はそのまま何とか馬の背にしがみついて、その場から逃げ出すことに成功した。

「ほら、嘘はついてなかったでしょ。十河城」と、とりあえず呟いてみた。

「もう、しぎーたら！そんなの、しぎーの為にもならないよー！！」

十河城は後ろでそんな事を叫んでいるようでしたが、全く何を言っているのか分からなかった。まあ、あの子はたまに意味が分からないことも言うので、いつもの事でしょう。

そうは思いつつも、私はどこか引っ掛かった。

―九州の会場

残る会場も僅かになってきましたので、ここで本腰を入れないといけませんね。そういうことで予め色んな策と根回しをしておきました。これで今回は妨害が成功するでしょう。

では、この会場の様子を見てみましょうか。おや、殿と多聞山城が同時にいますね。

危ない危ない。もし何の策も無ければ、一発で失敗どころか、まんまと捕まったに違いありませんね。

だけど、今回は大丈夫です。あの戦法によって、殿たちを倒してしまいましたよ。

「行け！古天明平蜘蛛！」

まずは先手必勝で投票箱に向けて、平蜘蛛をぶつけてみました。

案の定、殿によって防がれてしまいました。

「姉様。いい加減、こんな茶番はやめてください。こんな兇の真似事など」

「何を言いますか、我が妹よ。私は最近弛んでいる所領のみんなを引き締める為に、こん

な憎まれ役をー」

「嘘ですよね」

「悲しいミコ。私は妹にまで信用されていないなんてミコ」

「そもそも、今は巫女装束ではないでしょ！」

と、妹とのじゃれ合いはここまでにして、次に私が取る手はー

「やー。やーらーれーたー。ぱたり。．．．三十六計逃げるに如かず！」

おとなしく逃走することでした。

殿たちもやはり追いかけてきましたね。よし、その調子です。

ダッ、ダッ、ダッ！ダッ、ダッ、ダッ！

「しまった。行き止まりです。これでは捕まってしまうす」

「さあ、信貴山城さん。おとなしく私たちと来てください」

柳川城は私を上手く追い詰めたと思ったようですね。しかし、これこそが私の作戦だったのです。

「今です！皆のもの！」

「さあ、合戦ですね」ガサ、ガサ、ガサ

事前に内通していた有岡城を始め、多くの兜を坂の上から登場させた。

これにより、坂の上から一気に殿たちを強襲させて、その後私はゆっくり投票所に戻って箱を処理するだけです。これで、この会場での妨害は成功すると思っただけですが．．．。

「せーの、ちえすとー！」ドゴーン！ドドドドドッ！ビュンビュンビュン！

佐土原城を始め、先程の会場で姿を見せていなかった九州城娘が私たちの更に背後から強襲してきて、兜が全滅してしまっただけ。これはまさか！！

「有岡城。もしかして、私を謀りましたね」

「私のことをしっかり理解せずに私を共犯に選んだのは間違いでしたよ。それに私が言わなくても、釣り野伏せという、有名すぎる戦法は九州城娘の一人である柳川城さんには途中で気づかれていたでしょう」

ち、確かに有岡城と九州には浅からぬ因縁もありましたし、九州の会場で釣り野伏せを採用したのは迂闊でしたね。どうやら、私も焦り過ぎていたようですね。

ここは冷静になって大人しくー

「煙玉です！！」ポーン！！モクモクモク。

「こ、これは十河城さんの煙玉けほけほ。姉様、いつも間にかくすねたのですねけほけほ」私にも被害が出る前に早々に立ち去らなければ。

ここまで失敗していると、もう手段を選んではいられませんね。

．．．どうして、私はここまでムキになっているのでしょうか？たかが入札の妨害の為だけに。いや、そもそもどうして妨害しないといけないのでしょうか？

色々模索しているうちに投票期間は終わってしまいましたね。この最終集計会場も本来は運営だけの極秘だったようですが、あらゆる情報網を駆使して、何とか掴めました。この名古屋城内であると!!

かの三名城の一つであって、日ノ本中の札を集めるにはうってつけの場でしょう。この信貴山城ちゃんは全てお見通しなのだから、てへ♪

・・・さて、御約束通り、殿一行と多聞山城もいますが、この地で終わらせないと、この人気投票も無事に終わることになってしまいます。

正直、私にもここまでする理由も分からなくなりましたが、“私には関係ない”、こんなお遊びは無くなっても問題ないから、心のまま遂行しましょう。では、最後の出陣です!

「二礼二拍手一爆破!!」ドーン!! 「させません!!」ビュン!ドーン!
不意を突いたつもりですが、柳川城に上手く対応されました。

「やはり、信貴山城さんにはばれましたか」
さすがに驚きを隠せないようですね。しかし、どこか余裕も感じられます。

あの台詞からして、私が来ることも想定内だったのでしょう。しかし、私にはとっておきの隠し玉があるのです。

「総員出陣です!!」ガサ、ガサ、ガサ。

「信貴山城様の為に!!」 「ウォー————!!」

今回は兜ではなく、全国から瘴気某によって集めた足軽たちを仕向けることにしました。

「信貴山城さん、まさかそこまでの事をなさるなんて!どうしてです!?!」

「姉様!さすがに今回ばかりは許すわけにはいきませんよ!?!」

「最近はおのの瘴気某に耐性が付いたからと油断している貴方たちに、瘴気の恐ろしさを再認識させようと思ったのですよ」

「さすがのうちもそれが嘘だとは分かるだに」

あのやくもにも見抜かれるとは、私の虚言も弱くなったのだろうか。

私も初めはここまでするつもりもありませんでしたよ。しかし、ここまで来たらもう後戻りも出来ません!

「何とでも言いなさい!張り子の虎ではありませんよ!?!」

私は味方の足軽も構わず、特技も計略もどんどん発揮しました。

私は一体どうしたのでしょうか?こんな催し、いつもなら知らぬ存ぜぬを決め込めたはずなのに。ただの“人気投票”が私にとっては、こんなにも心をざわつかせるものなのか?もう自棄になるしかない—

「歯を食いしばって下さい、姉様!?!」パシッ!?!

いつの間にか目前まで迫って来ていた、多聞山城に頬を叩かれた。急な展開に私も動揺を隠せませんでした。

「この投票は多くの城娘や領民が楽しみにしていた催しですよ!それを姉様一人の我儘に

よって台無しにすることなんて許されるはずありませんわ!!」
私が我儘を言っている?・・・そうだったのかもかもしれませんね。梟雄の城である私にとつては、人々の人気を否応なく示される投票は最も忌み嫌うものだったのかもしれない。

「あら、何とか集計が終わったみたいですね」
集計が終わった? 一体何を言っているのか?

「ふふ、実はですね。姉様を欺くために、ここが集計場であるという偽情報を流したのですよ。その間に、本当の集計場である犬山へ札を集めていたのです。さて、結果はどうなつたでしょうか? なになに?」

普段の精神状態なら、そんなガセは見抜けたはずでしょう。まあ、いづれにしても私には関係ないですね。

「姉様、姉様! 姉様がなんと人気投票で二位になりましたよ!!」
・・・え? この私が二位ですか? 何かの間違いでしょう!!?

「姉様はよく聞きませず邪魔をしたのでしょうか。今回の入札は一人五票ですよ。勿論、私は姉様にも入れましたよ」

「アタシはしぎーのことは苦手だけど、一応は入れておいたよ」

「信貴山城さんの何だかんだ責任感が強い所もみんな分かってくれていますよ」

「まあ信長の一件では、色々動いて下さったさかい、あんまり憎み切れませんね」

気付けば、十河城を始め、かつて信長討伐に参加していた城娘の面々が私の周りに集合していました。そして、何より

「信貴山城様が敢えて憎まれ役を買っている所、私たちは好きですよ!」 「信貴山城様のたまに見せるチャーミングな所も拙者たちは好きです!!」

瘴気もどきで操っていた足軽たちが口々に私を褒めてくれました。

「まさか、この信貴山城ちゃんの人氣がここまで天井知らずになっていたなんて。さすが私、大勝利!」

「ふふ、姉様。とても嬉しそうですね」

「な、この妹は。相変わらず、調子が狂うことを・・・」

しかし、こんな気持ちは初めてですね。今まで、ここまで多くの存在に自分が認められた事があったのだろうか。まあ、こんな経験も悪くないですね。

そうです。また人気投票が行われたら、今度は私も参加してみましようか。

私の好みはクセがありますから、思わぬ番狂わせがあるかもしれませんね。

ふふ、今からでも楽しみですね。

「ところで、肝心の一位は誰ですか?」

「そうですね・・・どうやら、犬山城が一位みたいです」

「・・・。それ、何かしらの忖度が混ざってませんか?」